

SLAVIC-EURASIAN RESEARCH CENTER NEWS

No. 177 October 2025

研究の最前線

2025 年度冬期国際シンポジウム 「大国間競争と中小国の生存」 開催予告

今年度の冬期国際シンポジウムは、世界で激しさを増している大国間競争と、その中でのミドルパワーや小国の生存戦略をテーマとします。中国の超大国化、ロシアによる戦争、「アメリカ第一」主義、インドやトルコの大国化志向といった、世界を揺るがす国々の行動はどのような戦略や世界観に支えられているのでしょうか。世界秩序全体はどのように質的・構造的に変化し、その中で中小国はどのように主体性を発揮し、脱植民地化を進めようとしているのでしょうか。このシンポジウムではこれらのテーマを検討すると同時に、歴史的な視点も大切に、特に第二次世界大戦終結 80 周年を機に、戦前・戦中の大国・中規模国の戦略を議論するセッションを設けます。取り上げる国は世界のさまざまな地域にわたりますが、その中でスラブ・ユーラシア地域が大国・中小国の問題を考えるうえで持つ重要性も確認できるでしょう。全体として、国際関係論と地域研究、現代史研究の対話を通して、不安定化の時代を生き延びる知恵を探

Slavic-Eurasian Research Center 2025 Winter International Symposium

Great Power Competition and the Survival of Small and Middle Powers

Perspectives from Eurasia and Beyond

December 4 (Thursday)
9:50-10:00 (GMT+9) Opening Remarks

10:00-12:00 (GMT+9) **Session 1. Great Power Competition: Theory and Current Situation**
Papers: Hanna Samir Kassab (East Carolina University) (online)
Naoko Eto (Sokushun University)
Seiko Mimaki (Doshisha University) (online)
Discussant: Hirotaka Watanabe (Teikyo University) Chair: Michtaka Hattori (SRC)

13:30-15:30 (GMT+9) **Session 2. The Agency and Strategies of Middle and Small Powers**
Papers: Kei Koga (Nanyang Technological University)
Miras Zhiyenbayev (Maqbul Nurkabayev University)
Tomohiko Uyama (SRC)
Discussant: Mie Uda (Kanagawa University) Chair: Miran Bekurtsunov (National Institutes for the Humanities / SRC)

15:45-17:45 (GMT+9) **Session 3. Structural and Qualitative Changes in International Relations**
Papers: Ayse Zarakol (University of Cambridge)
Selbi Durdyyeva (Nottingham Trent University)
Maria Malksoo (University of Copenhagen)
Discussant: Yuichi Hosoya (Keio University) Chair: Akihiro Iwashita (SRC)

December 5 (Friday)
10:00-12:00 (GMT+9) **Session 4. Conflicting Strategies of Great and Middle Powers before and during World War II**
Papers: Fumio Kumamoto (Kumazawa University)
Marek Kornat (Institute of History, Polish Academy of Sciences)
Tomoyuki Hanada (National Institute for Defense Studies)
Discussant: Nobuo Tanaka (Seijo University) Chair: David Wolff (SRC)

13:30-15:30 (GMT+9) **Session 5. Russian Neo-Imperialism and the Reactions It Evokes**
Papers: Alicja Curanovic (University of Warsaw)
Hiromi Komori (Waseda University)
Mitsuharu Akao (National Museum of Ethnology)
Discussant: Yoko Hirose (Keio University) Chair: Yoko Asahima (SRC)

15:45-17:45 (GMT+9) **Session 6. India and Turkey Seek Great Power Status**
Papers: Kazuya Nakamizo (Kyoto University)
Hakan Yavuz (University of Utah)
Fumiko Sawae (Sophia University)
Discussant: Chiharu Takenaka (Rikkyo University) Chair: Manabu Sengoku (SRC)

Organized by:
Platform for Explorations in Survival Strategies at the
Slavic-Eurasian Research Center, Hokkaido University
JSPS KAKENHI Grant Number 23K28303
"Contemporary History of Great Power Nationalism"

Co-organized by:
NHU Global Area Studies Program "East Eurasian Studies" at the
Slavic-Eurasian Research Center, Hokkaido University
Japan Consortium for Area Studies (JCAS)
Contact: uyama@slavic.hokudai.ac.jp

Language: English
(英語で開会)

ACCESS MAP
Room 403, Slavic-Eurasian
Research Center (SRC),
Hokkaido University, Japan

Details & Online Registration
ウェブでの参加登録をお願いします
<https://src-hs.ssrc.hokudai.ac.jp/sympo/2025winter/index.html>

りたいと思います。報告者は、これらの分野の第一線で活躍する豪華な顔ぶれで、また討論者も強力な布陣となっています。

このシンポジウムは、センターの生存戦略研究プラットフォームと、科研費基盤研究 B「大国主義の現代史」の共催で、12 月 4・5 日に開かれます。会場（センター大会議室）で参加するための登録は 11 月 30 日締め切りで、オンライン参加の登録は当日まで受け付けます。いずれの場合もセンターのウェブサイトから登録してください。

<https://src-h.slav.hokudai.ac.jp/sympo/2025winter/index-j.html>

なお、シンポジウム前日の 12 月 3 日にはベアトリーチェ・ペナティ氏によるソヴィエト・ウズベキスタン史に関する本のプレゼンテーションがあります。またシンポジウム後の 12 月 7 日にはシンポジウムの外国人参加者のうち 6 人を報告者として、早稲田大学で国際ワークショップを開きます。いずれも詳しくはセンターのウェブサイトをご覧ください。

ふるってのご参加をお待ちしています。[宇山]

Great Power Competition and the Survival of Small and Middle Powers: Perspectives from Eurasia and Beyond

December 4 (Thursday)

9:50–10:00 Opening Remarks

10:00–12:00 Session 1. Great Power Competition: Theory and Current Situation

Papers: Hanna Samir Kassab (East Carolina University) (online)

“Weak States and Spheres of Great Power Competition: Sub-Saharan Africa”

Naoko Eto (Gakushuin University)

“China’s International Strategy in Search of a Winning Path”

Seiko Mimaki (Doshisha University) (online)

“Trump 2.0 and the End of the Postwar World”

Discussant: Hirotaka Watanabe (Teikyo University)

Chair: Michitaka Hattori (SRC)

13:30–15:30 Session 2. The Agency and Strategies of Middle and Small Powers

Papers: Kei Koga (Nanyang Technological University)

“Rise and Fall of Minilateralism in the Indo-Pacific”

Miras Zhiyenbayev (Maqsut Narikbayev University)

“Middle Powers’ Agency in the Fracturing World Order”

Tomohiko Uyama (SRC)

“Middle and Small Powers and the Paradox of Decolonization in the Post-Soviet Space”

Discussant: Mie Oba (Kanagawa University)

Chair: Mirlan Bektursunov (National Institutes for the Humanities / SRC)

15:45–17:45 Session 3. Structural and Qualitative Changes in International Relations

Papers: Ayşe Zarakol (University of Cambridge)

“Does the Concept of Middle Powers Make Sense in a World of Strongmen?”

Selbi Durdiyeva (Nottingham Trent University)

“Decolonising International Relations in Light of Russia’s Full-Scale Invasion of Ukraine: Lessons (Un)Learnt”

Maria Mälksoo (University of Copenhagen)

“Contested Peacetime in Ukraine”

Discussant: Yuichi Hosoya (Keio University)

Chair: Akihiro Iwashita (SRC)

December 5 (Friday)

10:00–12:00 Session 4. Conflicting Strategies of Great and Middle Powers before and during World War II

Papers: Fumio Kumamoto (Komazawa University)

“Breaking Away from International Cooperationism: Shigemitsu Mamoru’s Promotion of ‘East Asian Monroe Doctrine,’ 1935”

Marek Kornat (Institute of History, Polish Academy of Sciences)

“Poland and the Idea of Grand Alliance against Nazi Germany in 1939”

Tomoyuki Hanada (National Institute for Defense Studies)

“The Soviet Far Eastern Strategy and International Order during World War II”

Discussant: Nobuo Tajima (Seijo University)

Chair: David Wolff (SRC)

13:30–15:30 Session 5. Russian Neo-Imperialism and the Reactions It Evokes

Papers: Alicja Curanović (University of Warsaw)

“The Justice Narrative in Great Power Competition: Russian Messianism Revisited”

Hiromi Komori (Waseda University)

“Resistance to Covert and Overt ‘Imperialism’: The Case of Estonia”

Mitsuharu Akao (National Museum of Ethnology)

“Anti-Russian Policies in Latvia during Wartime and Their Impact on Russian-Speaking Residents”

Discussant: Yoko Hirose (Keio University)

Chair: Yoko Aoshima (SRC)

15:45–17:45 Session 6. India and Turkey Seek Great Power Status

Papers: Kazuya Nakamizo (Kyoto University)

“‘Make India Great Again’: Hinduization of India’s Foreign Policy”

Hakan Yavuz (University of Utah)

“Neo-Ottomanism as Great Power Nationalism: Turkey’s Quest for Autonomy in a Hierarchical Order”

Fumiko Sawae (Sophia University)

“Hierarchy and Turkey’s Revisionist Power Strategy as a Manifestation of a Simultaneously (Post)Imperial and Postcolonial Positioning”

Discussant: Chiharu Takenaka (Rikkyo University)

Chair: Manabu Sengoku (SRC)

ウクライナ研究ユニットから：講演「コペンハーゲン基準再考：EU 加盟候補国ウクライナ、モルドバ、ジョージアの事例を通じて」

センターの「ウクライナ及び隣接地域研究ユニット（URU）」では7月16日、講演シリーズ「危機を生きるウクライナと世界」の第9回として、内田州さん（東京大学先端科学技術研究センター特任研究員、SRC 客員准教授）による講演「コペンハーゲン基準再考：EU 加盟候補国ウクライナ、モルドバ、ジョージアの事例を通じて」をオンラインにて開催しました。

2022年2月のロシアによるウクライナ全面軍事侵攻をきっかけに、EUの更なる東方拡大をめぐる情勢が一変し、EUはウクライナ、モルドバ、ジョージアを加盟国として迎え入れることに、より積極的になりました。しかし、政治情勢を背景とした対応の変化は、EUが従来から採ってきた厳格な加盟基準の方針と、矛盾する可能性があります。内田さんの報告は、そのジレンマを冷静に描き出したものであり、価値ある情報発信となりました。

講演は、リアルタイムでは50名ほどの視聴をいただきました。なお、講演動画はYouTubeにて視聴可能ですので（<https://www.youtube.com/watch?v=UTjzAphZ-ig>）、ぜひご利用ください。[服部]

ウクライナ研究ユニットから：セミナー「Inhabiting Uncertainty」

7月18日、スラブ・ユーラシア研究センターにおいて、Irina Valkova氏を招いたセミナー“Inhabiting Uncertainty”が開催されました。

ヴァルコヴァさんはドイツ・ビーレフェルトを拠点に活動するマルチメディア・アーティスト、キュレーターで、このセミナーでは、ウクライナでの戦争によりオデッサから避難してきた一家をご自身が受け入れた経験をもとに、インスタレーション、ダンスや音楽のパフォーマンス、さらには避難民の女性自身が参加したテキストや映像によるドキュメンタリーなど多様なメディアを交差させながら、「不確実性を生きる」生のありかたに光を当てました。困難な経験や状況をめぐるアーティストの表現はサバルタンやポストコロニアルといった問題系にも通じるもので、会場の大きな関心を引きました。とりわけ、ウクライナで経験されている苦しみやその記憶をアートとして表象する権利や主体性は誰に属するのか、あるいはそうした代理行為はそもそも可能なのか、可能であるとすればどのような方法があり、その意義や限界はどこにあるのかといった点について、多様な角度から活発な意見交換が行われました。

さらに、ビーレフェルトをはじめとするドイツでのウクライナ避難民の現状や、現地でのウクライナ文化に関わる助成や支援の状況についても紹介され、文化と政治の関係や、現下の状況に対してアートには何ができるのかを改めて考える機会となりました。[安達]

2025 年 JCREES サマースクールを開催

スラブ・ユーラシア研究センターは、8月28・29日に、JCREES（日本ロシア・東欧研究連絡協議会）との共催で、「スラブ・ユーラシア研究サマースクール」を開催しました。JCREES とは、ロシア・東欧学会、日本ロシア文学会、ロシア史研究会、比較経済体制学会、日本スラヴ学研究会によって構成されるコンソーシアムで、設立以来、本センターが事務局を担当しています。このサマースクールは、2021年にロシア・東欧学会との共催で組織したことに端を発し、その精神を引き継いだ JCREES との共催は本年4回目、本センターとしては通算5回目の開催となりました。

本年度のサマースクールには、日本全国各地の大学から26名の応募があり、選考の結果、17名の学生（学部3～4年生10名、修士課程5名、博士課程2名）が採択されました（ただしうち1名は事情により辞退）。サマースクールは例年通り2部構成で、午前中はJCREES 所属の各学会およびセンターから派遣された講師6名による講義、午後は学生発表となりました。午前中の講義では、古代教会スラブ語論（日本スラヴ学研究会）、ロシア・フェミニズム文学（ロシア文学会）、中央アジア文化人類学（センター）、ソ連の対日政策（ロシア史研究会）、ベラルーシ政治（ロシア・東欧学会）、および経済制裁化のロシア経済（比較経済体制学会）をそれぞれテーマとしたものが実施され、講義後の討論には、参加学生が積極的に質問やコメントを提起しました。午後の学生研究発表も大変充実したものととなり、講師や学生による質疑応答では熱気に満ち溢れた討論が展開されました。

本サマースクールの大きな目的は、学生が自身の専門分野への知見を深めることは無論のことですが、それ以上に分野や地域を超えた様々な広がりを目を向けて研究に対する視野を広げ、積極的に意見交換することで学際的な展開の重要性を実感することにあります。講義や発表後の質疑応答や休憩時間の意見交換の様子などから、この目的は大いに達成できたようです。

参加学生や講師の一部は、自由時間を利用して、本学が所蔵する世界的に見ても特筆に値するスラブ・ユーラシア研究に関わる蔵書類の調査や資料収集を行ったりと、担当講師ではないセンター教員に論文・進学指導を求めて滞在を延長したりなど、サマースクール以上の成果も得られたようです。[仙石]



サマースクール集合写真

「東ユーラシア研究」プロジェクト (EES-SRC) のセミナー

東ユーラシア研究プロジェクトの一環として、8月から10月にかけて3回のセミナーを企画・実施しました。

まず9月2日には、スラブ・ユーラシア研究センターにワシントン大学のヨン Chol・ハ（Yong-Chool Ha）教授をお招きし、ソ連崩壊をテーマにご講演いただきました。

Ha 教授は比較政治学の専門家で、東北アジア地域を中心に、韓国・ロシア・中国などの政治や社会を比較分析されています。今回のセミナーでは、“System Reification and the Collapse of the Soviet Union” という題目のもと、ソ連崩壊を外部的・政治的要因のみによって説明するのではなく、ソ連型工業化を「社会主義的な後発工業化」の一形態として位置づけ、その発展過程を詳細に解説していただきました。

また、工業化の過程で形成された独自の制度構造と、その内在的限界が国家体制の持続可能性を弱め、最終的な崩壊へと至ったメカニズムについても、理論的かつ具体的に説明されました。

また9月30日、センターにおいて、科研費プロジェクト「国際河川を巡る「協調」と「対立」と連携したSRC・UBRJセミナーが開催されました。講師には、サンディエゴ州立大学経済学名誉教授のジェームズ・ガーバー（Dr. James Gerber）氏をお迎えし、“Border Economies: Cities Bridging the US-Mexico Divide”（国境経済：米墨国境をつなぐ都市）と題した講演が行われました。ガーバー先生は米国とメキシコの国境近くに暮らし、長年にわたりラテン・アメリカの経済、米国とメキシコの国境問題を研究されてきました。

今回のセミナーでは米墨国境地域における都市間経済の相互依存関係をめぐり、国境を越えた協力と競争の実態について活発な議論が交わされました。

2025 年 10 月 25 日、対馬市交流センターにて境界地域研究ネットワーク (JIBSN) のセミナー「JIBSN セミナー 2025 対馬」が開催されました。本セミナーでは「境界地域：リスクとまちづくり」をテーマに、北海道から沖縄、さらに離島自治体の首長や行政関係者が集まり、地域づくりの課題や国境地域が抱えるリスクについて議論しました。プログラムは 2 部構成で、まちづくりや環境・交通をめぐる実践報告に続き、「岐路の境界地域：JIBSN のこれから」と題するディスカッションも行われました。対面とオンラインのハイブリッド形式で開催され、境界地域研究ネットワーク JAPAN (JIBSN) をはじめ、対馬市、北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター境界研究ユニット (UBRJ)、「東ユーラシア研究」(EES)、長崎大学グローバルリスク研究センター (CGR)、中央学院大学社会システム研究所・プロジェクト研究「危機の中の境界地域」など複数機関が共催しました。〔ベクトウルスノフ〕



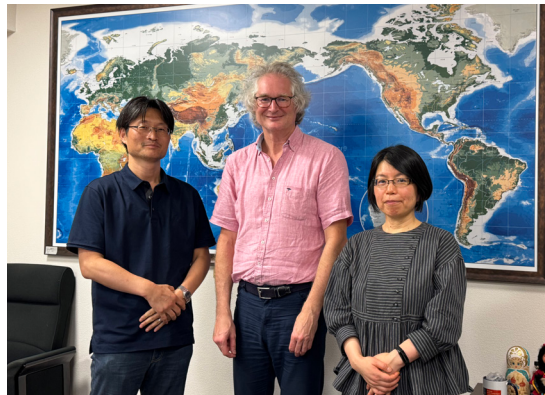


サンディエゴ州立大学経済学名誉教授のジェームズ・ガーバー (Dr. James Gerber) 先生によるセミナーの様子

ライプニッツ東欧・南東欧研究所所長ウルフ・ブルンバウア教授の来訪

8月21日にドイツのレーゲンスブルクより、センターとの協力の可能性を探るために、ウルフ・ブルンバウア教授が訪問されました。(この研究所の詳細は、<https://leibniz-ios.de/en/>)

1930年創立のライプニッツ東欧・南東欧研究所は、当該分野ではドイツで最大かつ最も権威のある研究機関の一つで、2017年から非大学系の研究機関の連合体で、ドイツの科学研究の中核を担うライプニッツ協会(Leibniz Association)に加盟しています。この研究所は、スラ



ウルフ・ブルンバウア教授と

ブ・ユーラシア研究の重要な国際誌の一つ *Jahrbücher für Geschichte Osteuropas* を出していることでも知られています。この研究所も、センターと同様に、学際的な地域研究を志向し、歴史家、経済学者、政治学者が “Institutionalization, De-Institutionalization, Re-Institutionalization,” “Mobility(s) and Inequality(s)” のような共通のプロジェクトに取り組む体制を整えているそうです。また、レーゲンスブルク大学大学院東欧・南東欧研究学科と連携し、教育活動にも従事しており、大学院生とポスドクを養成・訓練し、外部の研究者を招へいするフェローシップを有している点もセンターと共通しています。

ライプニッツ東欧・南東欧研究所は、これまでもカルフォルニア大学バークレー校、ミシガン大学、トロント大学といった北米の研究拠点とネットワークを築いてきましたので、アジアにもネットワークを広げたいそうです。ブルンバウア所長は、現在センターが進めている生存戦略研究とウクライナ研究ユニットの活動に大いに関心を示され、帝国の崩壊と再生、リベラルな世界秩序の危機といったテーマで研究集会を組織できるのではないかと意見を交換しました。なお、11月初めにオンラインの顔合わせが予定されており、そこでの議論を踏まえて、オンラインのワークショップを企画することを考えています。[長縄]

スカコフ氏の研究滞在

センターでは、ソ連のモダニズム文化の研究者 Nariman Skakov 氏を、来年 6 月まで客員研究者として受け入れます。スカコフさんはカザフ国立建築建設アカデミーを卒業後、オックスフォード大学で博士号を取得、スタンフォード大学助教を経て、今年までハーバード大学准教授を務めていました。研究成果は *Russian Review*, *Slavic Review*, *Studies in Russian and Soviet Cinema* といった名だたる学術誌に論文として発表されているほか、著書として、タルコフスキーを扱ったデビュー作に続き、二冊目となる *Reorientalism: From Avant-Garde to Soviet National Form* が、コロンビア大学出版からこの秋に刊行されたばかりです。日本とも縁が深く、2022 年には乗松亨平氏の招へいにより東京大学に研究滞在、その際センターも訪れて、“Soviet Orientalism and the Late Soviet Avant-Garde” と題するセミナーで講演を行いました。

今回の滞在では、戦後日本のアヴァンギャルド芸術運動である具体美術協会をテーマとして、伝統芸能とのつながりや国際的な文脈のなかで再検証する予定です。これは、ロシア・日本・ハプスブルク各帝国をつなぐアヴァンギャルドの国際的なネットワークの広がりや跡づける、スカコフさんが現在構想中の研究の一環で、センターが展開する帝国論や生存戦略研究等とも濃厚に関連するものです。ホスト教員である安達をはじめ、センター内外の研究者との共同研究に本人もたいへん意欲的で、今後の研究交流が期待されます。[安達]

横山恒子先生のご来札：研究奨励基金の立ち上げに向けて

昨年に続き、カリフォルニア大学ロサンゼルス校名誉教授・横山恒子オリガ先生が来札されました。今回のご滞在は約 2 か月で、今年もご尊父・山口民治氏の資料、ご母堂ヴェラ・ジェルナコワ氏およびそのご家族に関する資料、さらに横山先生ご自身の研究・教育資料の寄贈と整理のためにお越しくださいました。

横山先生のご両親およびご家族に関する資料には、当時の日記、書簡、写真などが多数含まれており、ハルビンにおける多文化的社会の様相や白系ロシア人の日常生活を生き生きと伝える、極めて貴重な内容となっています。資料の多くは手書きで、登場する人物や人間関係の特定には横山先生のご助力が不可欠であるため、スラブ・ユーラシア学講座博士課程でハルビン史を研究する李暢さんが、横山先生から直接説明を受けながら、情報の電子化作業を進めました。この過程では、情報資料部の兎内勇津流氏もご尽力をくださいました。

一方、研究・教育関係の資料については、横山先生のご指導のもと、野町が分類・整理を担当しました。そこには、横山先生の学生時代のレポートをはじめ、代表作の一つである *Discourse and Word Order* (1987) の原稿（未刊行章を含む）や、国内外の研究者との往復書簡など、きわめて興味深い資料が多数含まれています。整理作業のため詳細な検討はしておりませんが、たとえばイントネーション研究や統語論で著名な英語学者ドワイト・ボリンジャーとの文通は、言語学史の観点からも示唆に富む内容を含んでいる可能性があります。なお、これに先立ち、横山先生よりご寄贈いただいた蔵書が今年 4 月に SRC へ到着しました。この蔵書のリスト化作業には、スラブ・ユーラシア学講座修士課程の井口拓哉さん、池田航輝さん、橋爪真さんが携わり、現在も引き続き作業が進められています。

なぜ横山先生からこのような貴重な資料や蔵書のご寄贈を賜ることになったのかと申しますと、きっかけは2年前、複数の大学関係者や書店の方々から「横山先生が資料や蔵書の寄贈先を探しておられる」との情報をいただいたことでした。その後、ちょうど米国に滞在していた筆者が横山先生と直接ご連絡を取るようになり、ロサンゼルスのご自宅を訪問したことを契機に、ご寄贈の話が具体的に進み始めました。その際、筆者から、これらの資料や蔵書を活用しつつ、将来の「第二、第三の横山先生」を育てることを目的とした、女性研究者優先のフェローシップ創設をご提案申し上げましたところ、横山先生はこの趣旨に共感してくださり、センターに多額のご寄付を賜りました。

現在、資料整理の進捗に合わせて準備を進めており、「横山恒子オリガ研究奨励基金」としての立ち上げを目指しています。本奨励基金は、主として懸賞論文の実施および受賞者の札幌滞在研究支援に活用される予定です。なお、この寄付金の手続きにつきましては、本学卒業生・基金室の斎藤之史様（当時）および窪田一将様には大変お世話になりましたので、この場をお借りしてお礼申し上げます。

今回のご寄付に対し、9月7日には寶金総長より横山先生へ感謝状が贈呈され、併せて総長との懇談の機会も設けられました。横山先生の多文化に彩られたこれまでのご経歴は、どなたも自然と耳を傾けてしまう魅力に満ちていますが、今回は特にご専門の話題でも大いに盛り上がりました。

横山先生は近年、文理融合型の研究にも取り組まれており、語順に関する脳波計測実験や、適正語順の判断と自閉スペクトラム症との相関の可能性などについて、医学者である寶金総長と活発に意見を交わされていました。

また、この滞在を機会に、横山先生にはご講演をお願いしたのですが、これにも快諾され、8月22日には「言語間の体系的差異と翻訳におけるその対応」と題した講演会を開催し、多くの聴衆を集める盛会となりました。

横山先生からご寄贈を賜った資料の整理事業は今後もしばらく続く予定であり、次回の横山先生のご来札を一同、心より楽しみにしております。[野町]



総長室にて。

向かって左から横山先生、寶金総長、筆者



総合博物館のフロンティア基金寄付者銘板に

横山先生のお名前が刻まれました

SRC セミナー「文理協働シリーズ：古銭学編」報告記

去る7月27日、SRCセミナー「文理協働シリーズ」の初回となる「古銭学編」が終わりました。これは科学研究費基盤研究A「気候変動・疫病・戦争：アフロ・ユーラシアからの「14世紀の危機」」（研究代表者：諫早庸一）をベースに、この研究プロジェクトにおいて歴史学と協働する古気候学・古遺伝学・情報学・古銭学のそれぞれの分野につき、テーマにとらわれず、広く文理協働の実践例を紹介して議論していこうという試みです。初回は、当該科研古銭学班のメンバーである研究分担者の宇野伸浩氏（広島修道大学）と研究協力者の津村眞輝子氏（古代オリエント博物館）に加え、外部ゲストとして鶴島博和氏（熊本大学名誉教授）をお迎えして、イベントを行いました。

まずは諫早庸一（SRC）が「文理協働シリーズの目指すところ：「14世紀の危機」の解明に向けて」と題したイントロで上記の狙いを説明したのち、古銭学の文脈での「14世紀の危機」研究の一例を自分の関心に沿って報告しました。黒田明伸は、彼の「最初の銀の世紀」の議論のなかでロンドンの王立造幣局の銀貨発行のピークが1278～88年、1300～14年、1344～55年にあり、その最初の2つが大元ウルスでの紙幣の発行のピークと重なり合うことを指摘しています。この交錯は実質的には銀本位制（silver standard）の基で流通しており、宋代に中国に大量に退蔵されていた銀は、投下領からの税収として西方3ウルスに流れていました。こうして西方に流入した銀は、高い需要を誇った東方商品である絹や陶磁器の購買のため、再び東に還流します。このような銀循環システムが「最初の銀の世紀」を現出させたのです。しかし、第3のピーク（1344～55年）はどうか。フレグ・ウルスはすでに分解し、大元ウルスにしても、1350年代初頭には江南を失ってその中国支配が揺らいでいました。この期間に関して黒田が注目するのがベンガルの銀貨です。この時期、おそらくは雲南の銀を用いてベンガルでは大量の銀貨が製造されるのです¹。向正樹による大元ウルスの南海研究が、1340年代も南海交易がそれなりに盛んであった時期としていることも考慮すると、シルクロード——特にフレグ家の南路——が途絶していたこ



1 Akinobu Kuroda, “Economic Exchange: Money, Markets, and Taxation in Mongol Eurasia,” in Michal Biran and Hodong Kim (eds.), *The Cambridge History of the Mongol Empire* (Cambridge: Cambridge University Press, 2023), pp. 488–524.

2 向正樹『クビライと南の海域世界』大阪大学出版会、2024年。

の時期にむしろ南海では確かな交易があったことが窺えるのです。ここから「危機」の多面を見てとることができます。一方にとっての「危機」は他方にとってチャンスだったかもしれないのです。

次に本体の議論へと入っていきます。まずは津村氏による「ローマ帝国「3世紀の危機」を属州出土銀貨から探る：成分分析と歴史文脈による多角的検討」です。津村氏は所属の古代オリエント博物館が1975年から78年にかけて発掘調査したシリアのテル・ミシオルフェ遺跡において一括して出土した298枚のコインを分析し、それが3世紀前半のシリア属州で発行されたローマの劣質銀貨であったことを明らかにしています。出土銀貨は具体的にはローマ属州の4ドラクマ銀貨であり(12~13g)、不確定9点を除いて、カラカラ帝(在位211~217年)からホスティリアヌス(在位251年)までの時代のものでした。この銅貨と見まがうばかりの劣質銀貨は、周辺諸勢力との戦いが激化し、短命の皇帝が続き、国力が急速に衰退していく「3世紀の危機」の状況を反映しています。この時期、ローマ帝国の銀貨は軽量化が進み、銀含有率も著しく低下していくのです。属州貨幣の発行は3世紀半ばに已み、以後帝国は統一貨幣を導入します。対外状況に鑑みても、3世紀前半はローマとササン朝が、ユーフラテス川沿いで激しく相争った時代でした。ユーフラテス河右岸の要塞都市ドゥーラ・ユーロポスは252年、ニシビスは254年に陥落しており、この時代ユーフラテス河の渡河地点ともされるこの出土地も係争地となったことが予想され、銀貨の壺の持ち主も、その過程で251年頃死亡したことが推察されるのです。また銀貨が一括して出土していることにも津村氏は目を向けます。当時の銀貨が果たした役割として、俸給、建設費、税金徴収、諸外国への支払い、流通媒体などが挙げられます。分けても兵士への支払い、軍資金に巨額の出費が充てられていました。出土分の銀貨は3世紀のローマ兵士の年俸の約2年分にあたり、この銀貨の所蔵者は——おそらくは軍事的な目的で——これだけの貨幣をまとめて保持できる人間、または保持する必要がある人間といえるのです。出土銀貨に対して蛍光X線分析のほか、ミュオンによる非破壊深さ方向分析を実施した結果、先の全体的な傾向と同じく、銀質が著しく低下していることが実証されました。その一方で表層では銀濃度が高く、深層では銀濃度が低いという結果も出ており、この理由については現在検討中であるとのことでした。

次の報告は鶴島氏による「前近代イングランドの通貨システム：前近代アフロ・ユーラシア通貨システム比較研究序説」です。貨幣経済と権力との密接な関わりを、7世紀から12世紀までのイングランドを対象として、その通貨システムと通貨圏との分析に基づいて見ていくものでした。4世紀末から5世紀末にかけてローマ帝国では金銀銅の三金属制(trimetallic system)を基層に、基軸通貨を金貨とする通貨制度が成立しました。この「後期ローマ貨幣システム」は7世紀には、のちにヨーロッパを形成していく地域で解体を始めます。三金属制の解体の所以をアンリ・ピレンヌはイスラム勢力の侵入による地中海世界の交易の断絶に求めましたが、いずれにせよこの時代に銀貨が主要貨幣として台頭してくるのです。このヨーロッパ通貨システムの萌芽版は、ウィールド=アルトワ背斜構造帯(Weald-Artois Anticline)によって2つのサブ通貨圏に分かれており、この2つのサブ通貨圏が1つになるときにヨーロッパ通貨圏が誕生するというのが鶴島氏の議論です。この通貨圏は、フランク王国の支配地を核として拡大していくことになりますが、6世紀末から7世紀後半にかけてのメロヴィング朝の貨幣流通を見ると、その製造場(mint)の大小にもよりますが、その流通圏

は最大で300kmほどでした。当時の貨幣のデザインも、帝国の権威を表象するというよりは、より在地性の強いものであったのです。この構造帯の南西、ガリア・フランクのサブ通貨圏において、その発行者は司教が一般的でした。また、構造帯の基盤は地形的なものです。北海とイングランド海峡とは主たる潮流が反対であり、8世紀において北海とイングランド海峡とは異なる海域だったと理解されていたのです。7世紀から11世紀までの時代において、この通貨圏では3つの交換比率が見られます（1シリング＝4ペンス、1シリング＝5ペンス、1シリング＝12ペンス）。3つ目の比率がイングランド全体の基準となるのは11世紀になってからであり、973年以降のカロリング朝エドガ王による貨幣改革が計算方式の統一に寄与したという仮説を鶴島氏は提示しています。10世紀の後半に銀貨の使用を活性化させたドイツ銀はその後枯渇し、銀使用はヨーロッパで縮小していきます。そのなかでもイングランドのペニ銀貨がその質を減退することがなかったのは、金銀双方の使用と統治制度、特に税制度にみられる王権（中央）と銭貨製造人（地方）との間の紐帯が支えた通貨システムに起因するのだと鶴島氏は見えています。実際、王権ではなく地域の有力銭貨製造人と商人が金準備を担っていた可能性もあるのです。

最後の報告は宇野氏による「モンゴル帝国前半の銀貨・銅貨研究試論と貨幣の科学的分析」です。13世紀におけるモンゴル帝国の出現は、中華圏とイスラム圏との接触・交流を引き起こし、両交易圏が連結されます。それに応じて新たな通貨が登場し、銀が重視されるようになるのです。イスラム圏においては10世紀末ごろから銀不足が深刻化し、銅貨の役割が増していくものの、モンゴル帝国成立後、13世紀後半には銀不足は解消していきます。銀不足解消の過程と要因に関して、早くから中国銀の西方流出説が存在していました。例えばロバート・ブレイクは、10世紀末から深刻な銀不足に陥っていたイスラム圏が1260年頃に突如として銀不足を解消させた要因について、モンゴルによる華北征服の結果、大量の銀が中国から西方に流出したためであるという説を提唱しました。一方、近年では黒田が13世紀後半におけるユーラシア各地での銀流通の増加を指摘しています。その原因として、大元ウルスが南宋を1279年に滅ぼして江南に新たに設定したモンゴル王族の領地（投下領）から徴収した税を、紙幣が通用しない中国の外に対しては銀で送付したのではないかと考え、それが銀流通の増加の要因であるという仮説を提示したのです。宇野氏は、モンゴル帝国時代に中央アジア・西アジアで発行された銀貨をレーザー科学で分析することによって、これらの仮説を検証することができるのではないかと考えました。そもそもイスラム圏における銀不足の証拠の1つが、11世紀から13世紀半ばまでディルハム銀貨の不足を補うために発行されたとされるディルハム大型銅貨の存在です。13世紀中央アジアにおいては、カラ・ハン朝の銅貨（1208/09年）からチャガタイ・ウルス発行のもの（1269/70年）まで存在しますが、銀不足の状況に反して突如登場したのが、ホラズム・シャー朝のアラー・アッ＝ディーン・ムハンマド（在位1200～21年）が発行した大型銀貨（2g以上～9g未満）です。この状況の原因として、チンギス・カンの即位後、中国銀がモンゴル高原を通じて急激に流出した可能性を宇野氏は考えています。チンギス・カンの即位後、政権と連携したオルトク商人や宮廷に招かれたムスリム商人から、西アジア商品が大量に買い上げられたことが知られており、これらが銀の西方流出を引き起こした可能性があるのです。そしてこの説を検証するためには、大型銀貨の材料となった銀の産地を鉛同位体比分析で調査することが有効だと考えられるのです。この文理協働研究は、中央アジアにおける銀流通増加の時期が南宋征

服以前なのか以後なのか、この点について解明できる可能性を秘めているのです。

その後、議論がフロアに開かれました。津村報告に対してはそもそも銀含有量が5割を下回る貨幣を「銀貨」と呼べるのかというポイントについて、メッキ加工の技術やミュオン分析によって表層と深層とを分けて解析することの意義などに議論が及びました。鶴島報告に対しては、報告の要所の1つであった物品貨幣（commodity money）について、なぜウナギなのかという部分も議論されました。返答としては、ウナギの季節性の無さが挙げられています。タラやニシンといった魚が季節に沿うのに対し、ウナギは成魚となり川を遡上してしまえば、「いつでもいる」魚なのです。宇野報告に対して、議論の前提となった銀不足に関して、イスラム圏全体が銀不足であったのかという点や、どの仮説も基本的には南宋以降の銀流通という事実を重視しているのではないかといった意見が出されました。全ての報告は今後の研究の進展の可能性を大きく示唆するものであり、まさに可能性を提示するための文理協働シリーズの初回に相応しいものとなりました。[諫早]

2025 年度中村・鈴木基金奨励研究員の決定・滞在

2025 年度の中村・鈴木基金奨励研究員は以下の2名（五十音順）に決定しました。全員すでにセンターに滞在し、充実した研究活動を行いました。[仙石]

佐藤 良樹	同志社大学大学院 総合政策科学研究科 博士課程（後期課程）	2025. 9.22 ~ 10.10	ヴェニゼロス政権期のギリシャに おけるスラブ系住民に対する政策 (1910-33 年)	仙石
佐野 元昭 - 昭代	東京大学大学院 総合文化研究科 地域文 化研究専攻 博士後期課程	2025. 8.10 ~ 8.30	近代黒海地域の女性史・イスラ ム改革運動に関するロシア語史 料・研究文献調査	長縄

第5回百瀬フェローの決定

百瀬宏・津田塾大学名誉教授のご寄付に基づき設立された百瀬基金による、第5回百瀬フェローがこの度、決定しました。百瀬フェローシップは、スラブ・ユーラシア地域を研究するテニュアを目指しているポスドクの方を対象とした研究奨励制度です。このたびはセンターで慎重に審議した結果、内田州さんに2025年10月より、百瀬フェローの称号が与えられることになりました。ひきつづき、多くの方々の応募をお待ちしています。[岩下]

選考講評

採択者：内田州（うちだ・しゅう）

研究課題名：ウクライナ・モルドバ・ジョージアの非承認国家問題がEU加盟プロセスに及ぼす影響

内田州氏の研究は、ウクライナ、モルドバ、ジョージアが抱える分離独立派地域（非承認国家）に係る問題がEU加盟プロセスに影響を与えるのかを考察することを目的としている。

ロシアは非承認国家を積極的に支援することで旧ソ連諸国の EU 及び NATO 加盟を阻止しようとしているとの先行研究が複数存在し、それがゆえに同諸国の EU・NATO 加盟は至難だとする言説も見られるが、この見方は 2025 年時点でも正しいといえるのかということを、内田氏は問おうとしている。この問題を解明するために、内田氏は、各国の公開一次資料調査、国際機関資料調査を行い、またジョージア、モルドバでの聞き取り調査を実施している。内田氏はこれまで主として英語を駆使して高いレベルの研究業績を挙げてきており、その延長線上でさらに研究を前進させることが可能だと評価された。優れた成果が刊行されることが期待される。

採用にあたっての抱負

内田 州

この度、第五回百瀬フェローに採用頂きました内田州と申します。この度は採用頂き、大変光栄に存じます。

まず、本フェローシップを創設して下さった百瀬宏先生に心より御礼申し上げます。また、審査して下さった先生方、実務面でお支え頂いている事務所の方々を含め、全関係者に深謝致します。

百瀬先生は、名著『小国』の「岩波現代文庫版あとがき」で、「世界各地の問題を「憂慮」する際に、もっとも気をつけなければならないのは、意図せずして「高みの見物」という立ち位置をとってしまわないこと」と記しておられます。

これはまさに、南コーカサスの小国ジョージアやバルト三国のラトビアに実際に住み、南コーカサス諸国、バルト三国、ウクライナ、モルドバといった国々を研究対象としつつ、これらの国々がクレムリン（ロシア）のみならず、ブリュッセル（EU）やワシントン（米国）とどのような相互関係を構築しているかに大きな関心を払ってきた者として、あくまでも研究対象と適切な距離をとりつつも、一方で、武力紛争に直面する人々に寄り添い、国際社会の一市民としての当事者意識を忘れないように心掛けてきた自身の研究姿勢に、新たな背骨を与えてくださる金言です。

今回採択頂いた研究テーマは「ウクライナ・モルドバ・ジョージアの非承認国家問題が EU 加盟プロセスに及ぼす影響」であり、当然、旧ソ連諸国・ロシア関係が鍵となる訳ですが、唯一のスーパーパワーである米国、そして EU の関与も念頭におき、EU 加盟候補国 3 カ国、クレムリン、ブリュッセル、ワシントン間の力学を、政策立案者へのインタビュー等を通じて考察したいと考えております。

ロシアは非承認国家を積極的に支援することで旧ソ連諸国の EU 及び NATO 加盟を阻止しようとしているとの先行研究が複数存在しておりますが、この言説は、2025 年時点でも正しいといえるのでしょうか。この点を考察することで期待される成果は、1) EU 側が、EU 加盟を希望している旧ソ連諸国の分離独立派地域（非承認国家）と EU 加盟の相関をどのように考えているかが明らかになり、EU 加盟の条件が絞られ明確になる、2) 上記の先行研究が正であるならば、そのロシアの意図は現在でも EU に対して有効なのかを指摘可能となるかと存じます。

以上の点を明らかにすべく、2025 年 10 月から 1 年間、御指導御鞭撻賜りたく、何卒宜しくお願い申し上げます。



研究会活動

センターニュース 176 号以降、センターが主催・共催した諸研究会活動は以下の通りです（国際シンポジウムを除く）。[編集部]

7 月 30 日 SRC セミナー 「近年の東欧政治の動向：ルーマニアとポーランドの大統領選挙をもとに」 六鹿茂夫（霞山会 常任理事、静岡県立大学）「分断深まるルーマニア社会：親欧リベラル民主主義 vs 親 MAGA 保守・民族主義」、仙石学（SRC）「新たな『揺り戻し』なのか：2025 年ポーランド大統領選挙の背景」

7 月 31 日 SRC 生存戦略研究セミナー Aksana Ismailbekova (Leibniz-Zentrum Moderner Orient / SRC) “New Forms of Mobility between Kyrgyzstan and Russia amidst Russia's Invasion of Ukraine”

8 月 1 日 講演シリーズ「危機を生きるウクライナと世界」第 10 回 林忠行（北海道大学・京都女子大学）「ヴィシエグラード諸国とウクライナ戦争」

8 月 22 日 昼食懇談会 Julie Cassiday (Williams College / SRC) “Boys Love Meets Girl Power in Russophone Pop Culture”

8 月 22 日 SRC セミナー 横山恒子オリガ（カリフォルニア大学ロサンゼルス校 / SRC 共同研究員）「言語間の体系的差異と翻訳におけるその対応」

8 月 25 日 中村・鈴川基金奨励研究員報告会 佐野元昭 - 昭代（東京大学総合文化研究科地域文化研究専攻大学院学生）「近代ユーラシアに於ける帝国瓦解を越境する被支配集団女性エリート」

9 月 2 日 SRC (UBRJ/EES) Seminar Yong-Chool Ha (University of Washington) “System Reification and the Collapse of the Soviet Union”

9 月 19 日 公開講演会 ミルラン・ベクトウルスノフ（SRC）「植民地化と近代化のはざまで：クルグズ社会にみる部族秩序・権力・社会変容（1860 年代～ 1930 年代）」

9 月 26 日 生存戦略研究セミナー 雲和広（一橋大学）「人口で見るロシアとウクライナ：過去の経緯と戦時下の動態」

9 月 29 日 公開講演会 呉人徳司（東京外国語大学 / SRC）「シベリアの先住民チュクチ人のことばを追って」

9月30日 SRC-UBRJ Seminar : In Liason with the JSPS Project for "International River as Cooperative and Competitive" James Gerber (San Diego State University) "Border Economies: Cities bridging the US–Mexico Divide"

10月1日 SRC's FVFP Seminar Julie Cassiday (Williams College / SRC) "Russian Style, or What Twerking Air Cadets and 'Gay' Propaganda Tell Us About Putin's War in Ukraine"

10月6日 SRC Seminar Kaisla Kaheinen (University of Helsinki) "The Ethnographic and Linguistic Documentation Work of Andrei Aleksandrovich Popov on the Taimyr Peninsula in the 1920s"

10月8日 中村・鈴川基金奨励研究員報告会 佐藤良樹（同志社大学大学院総合政策科学研究科博士後期課程）「ヴェニゼロス政権期のギリシャにおけるスラブ系住民とギリシャ系難民の共存と対立」

10月9日 SRC 特別講演会 長谷川毅（カルフォルニア大学サンタバーバラ校）「最後の皇帝：ニコライ2世の退位とロマノフ帝政の終焉」

10月14日 ジュリー・キャンデイさんゲスト講義（東京） Julie Cassiday (Williams College / SRC) "Boys Love Meets Girl Power in Russophone Pop Culture"

10月25日 JIBSN セミナー 2025 対馬（対馬）「境界地域：リスクとまちづくり」 星京子（標津町）、上地常夫（与那国町長）、石橋直巳（根室市）、佐々木陽平（稚内市）「（第1部）境界地域のまちづくり：北海道と沖縄の取り組み」、渋谷正昭（小笠原村長）、一宮努（対馬市）、大嵩安幸（竹富町）、久保実（五島市前副市長）「（第2部）リスクと向き合う：環境と交通」

人事の動き

岡部克哉氏が助教に就任

9月1日より、センター付の助教として岡部克哉氏が着任しました。岡部氏は2014年に慶應義塾大学法学部政治学科を卒業後、2016年に慶應義塾大学大学院法学研究科政治学専攻修士課程を修了して修士（法学）を取得し、さらに2025年に同後期博士課程を修了して博士（法学）を取得しました。なお、氏はコロナ禍からロシアのウクライナへの全面侵攻が始まる2021年から23年まで、日本国在ロシア大使館専門調査員として勤務しています。

岡部氏の専門は、日露関係史であり、博士論文では日露戦争終結後から第一次世界大戦勃発前までの両国の関係を多面的に分析しました。従来は「例外的な友好の時代」と言われ

てきたこの時代について、直接的対立回避や緊張緩和といった「消極的」側面と、外向けの協力関係や共同歩調の演出にかかわる「積極的」側面があるとしたうえで、前者の「消極的」側面が両国の協調関係に一貫して現れていたと緻密に論じています。これらの観点から、三次にわたる日露協約締結、満州問題、「門戸開放」問題、辛亥革命、借款団問題などに関わる日露の外交交渉を分析し、査読論文を発表してきました。

センターは極東の歴史と国際関係論を国際的にも強みとしてきましたので、岡部氏がシベリア・極東部門を代表して国内外で活躍することが大いに期待されます。[長縄]

研究員・事務職員の異動

岡部 克哉 助教 2025 年 9 月 1 日（採用）

上村 正之 研究支援推進員 2025 年 9 月 30 日（退職）

林 健太 研究支援推進員 2025 年 9 月 30 日（退職）

ゲメニョク アレシャ 事務補佐員 2025 年 10 月 1 日（採用）

笹谷 めぐみ 研究支援推進員 2025 年 10 月 1 日（採用）

SRC での充実した夏季研究

オレーナ・ニコラエンコ

(フォーダム大学／センター 2024 年度外国人招へい教員)

2024 年度の外国人招聘フェローシップ・プログラムを利用したスラブ・ユーラシア研究センター (SRC) での滞在は、私にとって比類なき機会を与えてくれた。SRC においてベラルーシの労働運動について研究を行い、また日本における東欧・中央アジア研究の第一線の専門家と交流することができた。フェローとして、図書館の特別コレクションやアーカイブ資料へのアクセスが許可された。例えば、20 世紀初頭のベラルーシ労働運動に関する書籍が多数所蔵されており、ポスト・ソ連期の労働者運動研究を文脈化する上で大いに役立った。

フェローシップ終了後、私はルカシェンコ政権下における女性労働組合活動家についての論文草稿をまとめ、*Acta Slavica Iaponica* に投稿した。また、労働運動と労働組合に関する研究成果の一部は、*Social Movement Studies* や *New Labor Forum* といった学際的ジャーナルにも発表した。さらに編集部からの招待を受け、*Acta Slavica Iaponica* 第 46 号の「ロシア・ウクライナ戦争の起源」特集に寄稿する機会も得た。

日本の学年暦は 4 月始まりであるため、夏は学会やシンポジウム、講演会が集中する時期である。その中でも、SRC の夏季活動の目玉は、世界中から研究者が札幌に集まる国際シンポジウムである。2024 年のテーマは「新世界の坩堝？ 20 世紀初頭におけるロシアの国境地帯」であり、ロシア帝国西部国境地帯の都市イメージ、ロシア統治下におけるバルト・ポーランド地域の言語政策、1917 年革命前のコーカサスにおける反乱ネットワーク、そしてソ連初期の中央アジアにおける系譜研究などが論じられた。また、セミナーシリーズでは、フェローや招聘研究者による幅広いテーマの研究成果が発表された。

各フェローは滞在中に、北海道大学およびもう一つの日本の大学で公開講演を行うことが求められている。これにより、多様な聴衆と議論を交わすことができる。私は、SRC においては、青島陽子教授がリーダーを務める「ウクライナおよび隣接地域研究ユニット」の講演シリーズの一環として、「ロシア・ウクライナ戦争における女性の参加」について発表を行った。また、服部倫卓教授の紹介で、東京大学先端科学技術研究センター「ROLES」に出向き、「ウクライナとベラルーシにおける女性と革命」と題する講演を行った。

この滞在型フェローシップは、外国人研究者にとって日本文化に深く浸り、日本料理を楽しむまたとない機会でもある。札幌にも店舗がある紀伊國屋書店では、日本語書籍が豊



富であるだけでなく、日本史や観光案内書など英語書籍も多く揃えていた。例えば *My Hokkaido: The Ultimate Guide to Japan's Great Northern Islands* などである。

北海道は新鮮な海産物に加え、乳製品でも名高い。中央図書館から数メートルのところにある北海道大学マルシェ・カフェ&ラボでは、大学農場の牛乳を使ったアイスクリームや自家製チーズ、新鮮なミルクを味わうことができる。大通公園近くのキャンパス周辺にも、モカやメロンといった地元フレーバーのアイスクリームを提供するカフェが数多く存在する。少し足を延ばせば、菓子テーマパーク「白い恋人パーク」で多彩なクッキーやチョコレートを楽しむこともできる。

7月に北海道を訪れるなら、富良野のラベンダー畑は必見である。JR 札幌駅構内の旅行会社では、ファーム富田付近に立ち寄りバスツアーが催行されている。ラベンダー畑を散策した後は、ラベンダー風味のソフトクリームを味わうこともできる。

私は学問的にも文化的にも、実り豊かな、忘れがたい夏を過ごした。温かく迎えてくださった SRC の皆さまに深く感謝申し上げたい。職員の方々には、家族のためにゆとりのある住居を探していただき、大変助けられた。日本文化や学問生活、さらには東欧の政治や社会についての気軽な会話を楽しむことができたのも嬉しかった。

今回のご縁もあり、ウクライナおよび隣接地域研究ユニットの諮問委員に加わることであり、私にとって大きな名誉であった。北海道大学が今後も、ソ連崩壊後に独立を獲得（あるいは回復）した国々に関する学際的研究を推進していくことを心から願う。とりわけ、東欧の歴史と社会を「非ロシア的視点」から検討することは極めて重要である。

（英語から服部倫卓訳）



富良野のラベンダー畑で



SRC の同僚たちと

生きた民族学：民博とウポポイの空間における日常の実践

アクサナ・イスマイルベコヴァ

(ライブニッツ現代東洋研究センター／センター 2025 年度外国人招へい教員)

この夏、私は幸いにも北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター（SRC）で、フェローシップを得て短期滞在することができました。中央アジアとポスト・ソ連の文脈を研究する人類学者である私にとって、この機会は仕事上の画期的な出来事であると同時に、個人的な旅ともなりました。このフェローシップのおかげで、私は執筆に集中するとともに、研究成果を SRC の同僚と共有することができました。そしてそれだけでなく、京都大学の帯谷教授や国立民族学博物館の藤本教授のように、私の専門に近い地域やテーマを研究する日本の学者たちの仕事に深く接することができました。

しかし、私が最も感銘を受けたのは、日本の博物館でした。人類学者として私は、博物館は単なる遺物の収蔵庫ではなく、モノが物語、歴史、そして感情を語る生き生きとした空間だと考えています。博物館は世代や文化を跨ぐつながりを体現するのです。私は滞在中、北海道の国立アイヌ民族博物館（ウポポイ）と、大阪の国立民族学博物館という、消えることのない印象を与える 2 つの博物館を訪れることができました。

アイヌ文化に接したことは特に印象深かったです。アイヌは北日本の先住民族であり、多数派の住民とは異なる歴史、言語、世界観を持っています。宇山智彦教授と共に、アイヌ研究に携わる学者や活動家と面会しようとしたものの、夏のスケジュールの関係で、多くの方々と直接お会いすることは困難でした。しかしミルラン・ベクトウルスノフ博士の親切な支援のおかげで、白老町にある国立アイヌ民族博物館（ウポポイ）を訪れることができたのは幸運でした。

ウポポイは単なる博物館ではなく、生きた文化公園です。博物館の展示は、アイヌ語、コスモロジー、日常の仕事、歴史、文化交流を扱っています。インタラクティブ・ディスプレイ、シアター、ワークショップ、そして復元されたアイヌの集落（コタン）まであります。私が最も心を打たれたのは、子どもたちが工芸、パフォーマンス、物語の語り聞かせといった方法で、アイヌ文化に直接触れるよういざなわれていたことです。私にとって、ウポポイは単なる教育施設ではなく、参加と体験を通じていかに文化遺産が生きたものとして保たれるかを力強く思い起こさせてくれる場所でした。

私の滞在のもう一つのハイライトは、大阪にある国立民族学博物館への訪問でした。「民博」として知られるこの博物館は、世界中の文化を彩り豊かに紹介しています。展示室を歩きながら、私はブラジルの羽根付きの葬儀用仮面、ポーランドのウェディングドレス、中国の提灯など、無数の工芸品に出会いました。各セクションは、さまざまなコミュニティの肌合い、色彩、音を再現しており、子どもにも大人にも分かりやすいものでした。

個人的には、博物館の中央アジア資料コレクションが最も魅力的でした。そこでは、私が研究している地域に関係する幅広い種類のモノ、録音、写真を目にしました。これらのモノは単なる物質的遺物ではなく、人々自身と同じように行動し、反応し、感情を呼び起こす、人類史の積極的な参加者なのです。この視点は、同業者である藤本透子教授と議論する際にも私を導いてくれました。藤本教授は、かなり昔に日本の研究者たちが中央アジアで集めたクルグズ（キルギス）のいくつかの資料を同定するのを手伝うよう私に依頼しました。資料の中には、現地での名称や正確な説明が付いていないものがありました。私は自分の知識に基づいて、これらの資料に用語

と解説を与えることができました。それらの多くは、新疆のクルグズ人コミュニティから来たものでした。

この小さな同定作業は意味のあるものだと思われました。来年、国立民族学博物館はユーラシアに関する展示を計画しており、これらの新たに同定されたクルグズの資料は、その一部をなす予定なのです。私の専門知識がこれらのモノにスポットライトを当て、より幅広い観客に認識され学ばれることを可能にするのを助けたということは、私にとって誇りと刺激の源となりました。

博物館の仕事をこれほど力強いものにするのは、感情の共鳴だと私は見ています。大阪と白老（北海道）で私が出会ったモノは、研究者である私だけでなく、一緒に行った私の家族にも語りかけてきました。展示を見ながら、私たちは魅惑、好奇心、そして親近感さえ感じました。モノは活性を欠いているわけではありません。そこには物語や関係性、記憶が宿っています。展示はこれらの物語が国境や世代を超えることを可能にし、伝統や、共有された歴史、物質的な知識が継承される方法を形作なのです。

フェローシップを振り返ると、日本で過ごした時間は学术交流以上のものだったことに気づきます。モノに耳を傾けること、それらが時空を超えてコミュニティをつなげる様子を見ることを学び、日本の文化施設がそうしたつながりにいかにして命を吹き込むかを体験することができました。ウポボイでのアイヌ文化復興や、民博のグローバルな視野を通して、私は人類学の使命、すなわち人々やモノ、伝統を静的なものではなく、生きていて関係性のあるものとして捉えることについての認識を新たにすることができました。

私は、SRC でのホストであった宇山、青島、長縄、ベクトウルスノフ各教授と同僚と、私を歓迎してくれた他機関の帯谷、藤本両教授に深く感謝しています。札幌でのフェローシップは短期間でしたが、学術、文化、感情の面にわたる多くの扉を開いてくれました。自分の研究に立ち返れば、中央アジアが世界の学術研究に占める位置についての新たな洞察だけでなく、博物館が生きた空間として、過去と現在、ある文化と他の文化の間の対話をどのように支えているかについての新鮮な視点も持ち帰りました。

このように、私の日本への旅は、人、アイデア、そしてモノの交換の価値を思い出させてくれるものになったのです。

（英語から宇山智彦訳）



民博でインドネシアの魔女・聖獣と



民博の収蔵庫でクルグズのフェルト製敷物を調査

学界短信

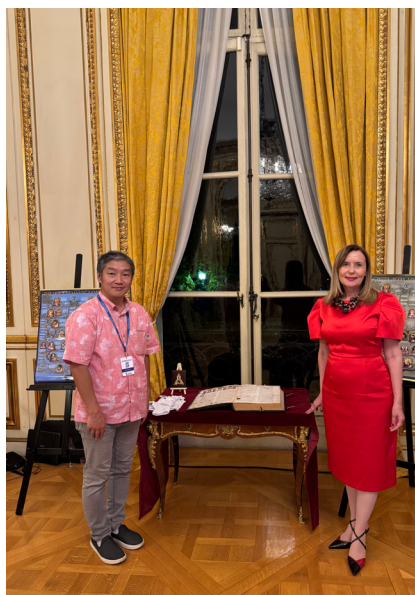
第 17 回国際スラビスト会議参加記

2025 年 8 月 25 日から 30 日にかけて、パリのソルボンヌ大学において第 17 回国際スラビスト会議が開催されました。今回の会議には、スラブ研からは安達研究員と筆者が参加しました。

国際スラビスト会議は、1929 年にプラハで第 1 回が開催されて以来、言語学・文献学・文学・フォークロアなど、広い意味でのスラブ学研究者が一堂に会する国際会議で、5 年ごとにスラブ諸国で行われてきました。今回の会議は、その長い歴史の中で初めて非スラブ圏であるフランスで開催された点で特筆されます。前回は 2018 年にベオグラードで開催されましたが、ロシアによるウクライナ侵攻の影響により、当初予定されていた 2023 年から 2 年延期されての開催となりました。このため、ロシア代表团としての公式参加は認められず、ロシアの研究者は個人資格で参加する形が取られました。なお、ロシア側ではこれにあわせて、「国際参加型の全ロシア・スラビスト会議」を 2025 年 12 月 16 日・17 日に開催する予定です。

初日は、著名な作家ボリス・アクーニン、ウクライナ文学者ジョバンナ・ブロージ（ミラノ大学）、ロシア文学者ジョルジュ・ニバ（ジュネーブ大学）、および印欧語学者アレクサンダル・ロマ（セルビア学士院）による基調講演から始まりました。会場にはウクライナの国旗が掲げられ、ロマ氏を除く講演はいずれもロシアとウクライナをめぐる現在の政治状況を反映した内容であり、時代の空気を象徴する開幕となりました。彼らの報告はオンラインで読むことができます（<https://mks-paris.sciencesconf.org/resource/page/id/21>）。

翌日からは、各セッション、テーマ・ブロック、ラウンドテーブル、ポスターセッションなど、合わせておよそ 150 のプログラムが組織されました（<https://mks-paris.sciencesconf.org/resource/page/id/19>）。欠席者を考慮すると、参加者はおおよそ 600 名ほどであったと推定されます。28 日は国際スラビスト会議の各研究部会の会合日に充てられていました。なお、セルビアのスラブ学者にとっては、「フランスにおけるセルビア学 100 周年」にもあたる年であったため、会議では記念ラウンドテーブルを企画するなど、特に熱心に活動していたようです。この文脈の中で、在パリ・セルビア大使



セルビア大使公邸晚餐会にて。
向かって右はドラギチェビッチ氏

公邸において、国際スラビスト会議の執行部およびセルビアと関係の深い研究者を招いた晩餐会が開催され、私もその席に招待を受けました。これら一連の催しで重要な役割を担っていたのは、セルビア・スラブ学コンソーシアム会長のライナ・ドラギチェビッチ氏で、同氏はセンターでも講演を行っており、現在は *Acta Slavica Iaponica* のアドバイザー・ボードメンバーでもあります。

会議が扱う分野は多岐にわたり、複数のセッションが同時並行で行われたため、論評すること自体困難ですが、全体として次のような印象を持ちました。

第一に、ロシアからの参加者が比較的少なかったこともあります。かつては各国を代表する重鎮研究者が一堂に会する由緒ある国際会議という印象が強かったのに対し、今回は特に若手研究者の活躍が目立ち、会議そのものの性格が変化しつつあることが感じられました。

第二に、かつてのエリートのスラブ語学者たちは複数のスラブ語を自在に操るのが当然であり、すべてのスラブ語が実際に使用される「多言語的」な会議でした。しかし現在では、各報告者がそれぞれの言語で報告を行う点で「多言語的」ではありますが、必ずしも相互に十分な意思疎通ができていたとはいえない場面も少なくありません。例えば、ポーランド語のトレーニングを受けていないクロアチアの方言学者がポーランド語の発表を聞いて理解することは、やはり難しいのが現実です。文学・文化研究では、恐らくもっとこの傾向が強いでしょう。英語による発表の割合が増加している点も顕著であり、この傾向は偶然ではなく、時代の変化を反映したものといえるでしょう。

第三に、言語学分野に限って言えば、全体として従来の研究伝統に比較的忠実であり、理論面や分析方法は時代により変わりますが、いわゆる学際的な視点から新たな展開を試みる発表は、筆者の見聞する範囲ではほとんど見られませんでした。この意味では保守的とも言える国際学会だと思います。

なお、現在では一部個人での参加も可能となっていますが、国際スラビスト会議は本来、加盟各国が国内協会を設立し、その代表団を派遣するという制度のもとに運営されてきました。しかし、近年、この制度を今後も維持すべきかどうかについて議論が進められています。次回の会議は 2029 年にプラハで開催される予定ですが、プラハ大会に関しては、現地の主催者の判断により準備が進められるとのこと。[野町]



筆者が所属する「スラブ諸語文法構造研究部会」の委員と共に

「Esimde: 私の記憶にある」研究プラットフォームにてのセミナー

ミルラン・ベクトゥルスノフ特任助教は、9月17日から10月5日にかけてクルグズスタン（キルギス）国立中央文書館および国立中央政治資料文書館にて資料収集を行いました。現地調査のほか、現地研究者との交流を深めるため、ビシケク市内で開催された研究プラットフォーム「Esimde（私の記憶にある）」のセミナーにも参加しました。

Esimde 研究プラットフォームは、記憶研究における西欧アカデミアの影響を受け、2014年にエルミラ・アビルベク（Elmira Abylbek）氏によって設立されました。その目的は「人々の歴史と記憶の中に残る出来事、事実、過程、そしていまだに「空白のページ」として残されている問題を研究し、理解するための議論の場をつくること」にあります。

筆者の長年の観察によると、Esimde は専門的な研究成果を社会に広く共有し、専門家でない人々にもわかりやすい言葉で歴史の諸問題を伝えることで、多くの関心を集めています。また、学術的枠組みにとどまらず、一般の人々の記憶を収集・記録するオーラル・ヒストリーにも力を入れている点で知られています。

注目すべきプロジェクトとして、毎年秋に実施されている1916年中央アジア反乱に関連する研究があります。これは、中国へ避難したクルグズ遊牧民の足跡をたどり、当時の出来事に関する現地住民の記憶を収集・記録する取り組みで、国内外から大きな注目を集めています。さらに、Esimde は数年に一度、「ポスト共産主義の中央アジア：再解釈の空間」と題する国際会議も開催しています。



クルグズ・トルコマナス大学の
ズフラ・アルティミシヨワ准教授



自由討論の様子(右から Esimde研究プラットフォームの企画者エルミラ・アビルベク氏、筆者)



セミナー参加者との集合写真

今回のセミナーでは、クルグズ・トルコマナス大学のズフラ・アルティミシヨワ（Zukhra Altyмышova）准教授が「クルグズスタンにおける階級闘争の実施：1920年代～1930年代」というタイトルで報告を行い、ミルラン・ベクトウルスノフ特任助教が討論者を務めました。アルティミシヨワ氏は、クルグズスタンの歴史の中でもあまり知られていない“空白”の一つである、ソヴィエト政権による階級闘争政策の企画と実施過程、そしてその犠牲となったクルグズ遊牧民の運命について解説しました。

同氏は2024年に、クルグズスタン、カザフスタン、ウズベキスタン、ウクライナの各国文書館での調査成果を基に、著書『ソヴィエト政権のクルグズスタンにおけるクラーク階級の排除政策の実施（1920～1930年代）』（クルグズ語）を出版し、現地学術界で高い評価を得ています。今回の報告は、この著書の内容を要約する形で行われました。

討論では、ベクトウルスノフ特任助教が報告内容を高く評価した上で、報告者および聴衆との議論を深めるためにいくつかの批評的コメントを述べました。特に、「クラーク（富農）」「ベドニャク（貧農）」「セレドニャク（中農）」といった社会階級のカテゴリーが、ヨーロッパ・ロシアの農民社会の文脈から導入されたものである点に着目し、これらの概念がクルグズ遊牧社会にどの程度適用可能であるのか、またクルグズ社会の階層構造を分析するには遊牧経済の文脈を重視する必要があるのではないか、という問題提起を行いました。

セミナーには、クルグズスタンの歴史や文化に関心をもつ多くの人々が参加し、その大半は若い世代の視聴者でした。長年、ソ連時代のイデオロギーや独立以降の国民国家による公式言説に限定されがちだったクルグズスタンの歴史研究は、Esimde 研究プラットフォームのような新しい場において、より自由に考え、自由に議論する機会を得つつあると感じました。

Esimde 研究プラットフォームのウェブサイト <https://ru.esimde.org/en/home>

[ベクトウルスノフ]

ICCEES 参加記

7月にUniversity College London（UCL）で開催されたICCEES第11回世界大会には、スラ研からは専任教員に加えて非常勤研究員、博士課程学生と幅広いメンバーが参加しました。それぞれの参加者に、学会の報告記を執筆いただきました。

ICCEES 第11回世界大会（ロンドン）

2025年7月21-25日にICCEES第11回世界大会がイギリス、ロンドンのUCL教育研究所で開催されました。日本からは若手を中心に74名が参加しましたが、これは開催国のイギリス、アメリカ、ドイツについて4番目の参加者数だそうです。今回の大会に合わせて、ICCEESへの顕著な貢献に対して二名の研究者に特別な賞が授与されましたが、カナダのHeather Coleman教授と並び、沼野充義先生がその名誉に預かったこともたいへん嬉しいことでした。

ICCEES（International Council for Central and East European Studies／国際中欧・東欧研究協議会）は中欧・東欧、コーカサス、中央アジア、極東を研究対象とする各国の学際的研究協会の連合体で、5年に1度世界大会が開かれます。ASEEES（Association for Slavic, East

European, and Eurasian Studies / スラブ・東欧・ユーラシア研究協会) はアメリカを基盤とする国際学会ですが、ICCEES はヨーロッパから発展しつつも、カナダ、オーストラリア、日中韓を含む実に世界的な学術ネットワークです。ICCEES 第 9 回世界大会は日本の幕張で開催されましたが、これは北米・ヨーロッパ以外で開催された初めての大会でした。第 10 回はカナダのモントリオールで開催予定でしたが、コロナ禍にあって残念ながらオンラインでの開催となりました。今回、10 年ぶりの対面での大会の開催となりましたが、世界で四番目の参加者数が日本からあったという意味では、幕張以来の熱量がまだ継続しており、スラブ・ユーラシア地域研究における日本の存在感が十分感じられたと言ってよいのではないかと思います。

今回のテーマは「破壊的变化 disruption」。ロシアによるウクライナ全面侵攻の余波が去らないなか、私たちの地域研究は従来のアプローチを「大変革 disruption」する必要性に迫られているという切迫感のなかで大会は開催されました。私は ICCEES 情報局の担当として ICCEES 執行委員会と国際評議会の会議に出席しましたが、研究の方法論の問題だけではなく、研究者の世界の「混乱 disruption」があることも感じられました。2025 年 6 月 3 日に ASEEEES がロシア政府から「望ましからざる団体」に認定されたことはよく知られていると思いますが、それに先んじて DGO (German Association for Eastern European Studies / ドイツ東欧研究協会) は 2024 年 2 月 14 日に「望ましからざる団体」に認定されたのち、7 月 25 日に「過激派組織」へと一段階引き上げられていました。このことにより、GDO と協力した者はロシアで最大 12 年の懲役刑に直面するリスクを負うこととなります。GDO の関係者は、この認定が引き起こしているドイツの学界への深刻な影響を口にしていました。ロシアのみならず、その周辺諸国に関わる研究者や留学生の行き来も困難をきたすことになりかねないのです。このようなリスクのなかで、ビザ体制も影響を受けているように感じます。今回の ICCEES ロンドン大会の参加者でも、ビザが下りずに参加が不可能となった方がかなりいたようです。ロンドン大会組織委員会はこの件についても情報を集めて公的機関と対話をするとして述べていましたが、国際的なアカデミアの「断裂 disruption」もまた懸念されます。私たちはこうした状況のなかで、地域研究—いわゆる旧社会主義圏を対象とする地域研究をどう再編していくのか、深く考えさせられました。また冷戦的世界観に逆戻りしてしまうのか、当該地域をたんなる「ロシア」の影響圏と見ないような新しい視点をもつことはどう可能なのか、当該地域で生じている大きな転換は現在のグローバルな世界(とその見方)をどう変化させるのか。社会科学において地域研究は衰退していると言われて久しいですが、現在の世界で進行する「破壊的变化」を理解するためには、むしろ地域に内在する歴史・文化的経路依存を踏まえ、対象を比較しながら分析モデルを構築していく地域研究の手法が、なお一層、求められていくようにも感じます。ロンドン大会で会ったある経済学者は、自分は(中央アジアを研究対象としながらも)社会科学の普遍的問題を普段考えているが、地域に関する幅広い知識や意見交換のために、ICCEES はとても重要だと述べていました。今後、現在の変化の向こうにどのような「普遍」を見出さうのか、それを考えるためにも、多様な地域の特長を知らなければならない、それらの比較と対話の中から、新しい「普遍」もまた、見えてくるのではないかと思います。

今回の大会をもって、ICCEES 会長は、5 年間その職責を務めたカナダの Andrii Krawchuk 氏から、ICCEES ロンドン大会の組織委員会の長を担ったイギリスの Matthias Neumann 氏へ

と変わります。5年後の次の大会に向けて ICCEES の新しい体制が発足することになります。2030 年、次の第 12 回世界大会は上海の華東師範大学で開催されることが決定しています。世界大会は再びアジアに戻ってきます。次の大会までの 5 年間、最初の東アジア地区大会であるスラブ・ユーラシア研究東アジア大会が 2026 年 6 月 11-13 日に福岡で開かれます。国内外からの積極的な参加を期待したいと思います。[青島]

学会参加記 2025 ロンドンとウランバートル

2025 年 7 月、University College London (UCL) で開催された ICCEES XI World Congress に参加し、研究報告を行った。私は 2020 年 9 月から一年間、UCL と同じロンドン大学連合の構成校である、London School of Economics (LSE) の修士課程に在籍した経験があり、わずかながらロンドンは馴染みのある街であった。

当時は新型コロナウイルスの影響によってロックダウンが導入され、多くの飲食店等が閉鎖された時期であった。最初の変異株であるアルファ株が英国で発見されたまさにそのタイミングで現地に滞在しており、当時のボリス・ジョンソン英首相が「今年のクリスマスはありません」と述べたことは今でも鮮明に覚えている。しかし、ロックダウン下でも大学は基本的に開かれていたため、授業課題や修論執筆のために、LSE 図書館のみならず、UCL スラブ・東欧研究学院 (SSEES) の図書館や、ロンドン大学連合の図書館である Senate House Library (SSEES 図書館も同じ建物に入っている) に日常的に通い、毎日のように遅くまで入り浸っていた。

ICCEES への参加にあたり、プロポーザルの提出が前年度の慶應義塾大学大学院の在籍中だったことから、私はひとまず単独での応募をしていた。そのため、主催者側が組織したパネルにおいて、初対面の二人の若手研究者と一緒に報告を行った。

私の報告は、ソ連解体前後のソ連・ロシア外交の変化と継続性を、CSCE プロセスとの関連で論じるものであった。フロアの多くはソ連外交や CSCE プロセスを専門としていないことが推察されたが、現在の国際情勢が当時のソ連外交に大きく関係していることから、様々な角度からコメントをいただくことができた。

もっとも、他に報告を行った二人の研究者は、私と同様に 1990 年代前半という近い時代を扱いつつも、それぞれボスニアの内政とドイツ・セルビア関係に関する内容だったため、全体としてあまり統一感のないパネルになってしまった。私のように国際学会の経験が浅い人間にはなかなか難しいが、事前に近い分野の研究者とパネルを組織して応募することの重要性を痛感した。ICCEES への参加は、自分の報告へのコメントのみならず、様々な面で学びを得る貴重な機会となった。

ロンドン出張から約一ヶ月後の 8 月末、モンゴルで開催された国際会議 “50 Years Helsinki Final Act: European Experience and Asian Future” で発表を行った。この会議は、私が昨年度より参加している東京大学のシンクタンク ROLES のプロジェクトの一環であり、モンゴル国家安全保障委員会・戦略研究所 (Institute for Strategic Studies, National Security Council, Mongolia: ISS) を共催として開かれた。

会場はウランバートル市内ではなく、テレルジ国立公園という巨大な公園の中にあるホテルの会議室だった。チンギス・ハーン国際空港はアクセスが非常に悪く、公共交通機関を利用して中心部に向かうことはかなり難しい。そのため、20時過ぎの到着だったにも関わらず、空港まで ISS の研究員の方々に出迎えていただき、会場のホテルまで2時間弱も自家用車で送迎していただいた。

この会議は、1975 年のヘルシンキ最終文書 (Helsinki Final Act) 採択 50 周年を記念し、ヨーロッパの経験を元に、将来のアジアにおける信頼醸成・安全保障協力について考える試みであった。日本とモンゴルに加えて、ドイツやフィンランド等から合計で約 30 名の研究者や元外交官が出席し、2 日間に渡って議論が行われた。

私の報告は、1970 年代からソ連解体までの外交政策を、CSCE プロセスとの関係で概観する内容だった。ロンドンでの ICCEES とは異なり、フロアに CSCE プロセスを専門とする方が一定数いたことから、前回とは異なる角度から鋭いコメントをいただくことができた。会議後の夕食では、自分と近い世代のモンゴルの研究者たちと意見を交換した。彼らの親の世代にはソ連で教育を受けた人々が多くおり、中口に挟まれたモンゴルの複雑な地政学的位置に関する世代間の認識のギャップなどについて、興味深い話を聞くことができた。この貴重な経験を、しっかりと今後の研究活動に反映していきたい。[堀田]

第 11 回 ICCEES 世界大会に参加して

今回の ICCEES 世界大会は昨年ソウルで開催された東アジア大会に次いで 2 回目の国際学会となりました。報告は 2 日目の午前中で、“A Dialectic to the ‘Ethnic Paradox’: From the Sight of Genetic Discourses in the Early Works of Iulian Bromlei’s Etnos Theory” というタイトルで行いました。内容としては、ソ連民族学研究所の所長ユリアン・ブロムレイの民族ヒエラルキー論を分析するものになります。司会と会場からそれぞれ質疑があり、ヒエラルキー論はロシア化政策と関連があるのか、彼の理論には実際の参与観察が反映されているのか、またなぜソ連という地域でそのような議論が登場したのか、といったことを問われました。最後に司会から「何か面白い話 (ファン・ファクト) はあるか」と聞かれたので、英国に遡るブロムレイ家の来歴を語ったところ、思いのほか会場が盛り上がりしました。

今回の大会は非常に規模が大きいものでしたが、逆に言えば一人あたりの持ち時間が制限され (プレゼンは 15 分)、また分野のかなり異なる人々を前に報告しなければならない状況でもありました。そのため、詳細に研究成果を話すよりも最低限のプロットを紹介する趣が強く、質疑もより一般論に引き付けた発言やそれを踏まえたディスカッションになる傾向がありました。その点、英語圏の人々が思わず反応したくなるようなトピックを如何にプレゼンに盛り込むかが課題だと思いました。特に自分のようにマージナルなテーマを扱う場合、前提知識の説明にどうしても時間を取られてしまいます。そのため、紹介した研究がより大きな文脈の中でどのような意義を持つのか、それが一目でわかるトピックを入れるべきでした。

報告後は気分転換にロンドンの公園を歩きまわりました。特に気に入ったのはリージェンツパーク (ジョージ 4 世が摂政/リージェントだったことに由来) で、朝の散歩も含め 2 ～ 3 度足を運びました。イギリスでは公園で犬にリードを付けないらしく、芝生に座って

サンドイッチを食べているとワンちゃんたちが次々寄ってきました。バッキンガム宮殿横の公園やハイドパークにも行きましたが、野鳥の種類が多く動物との距離が近い印象でした。ハイドパークへの道すがら、観光したアリバイ作りにトラファルガー広場、議事堂、ウェストミンスター寺院などを見物しました。テムズ川を渡る刹那、橋に溢れる観光客の只中で一人観光気分になれない自分に気がつきました。折しも感じた小雨に傘をさすと、対岸の議事堂から聞き慣れたチャイムが重々しく響き渡ります。鐘の音やテムズに捧ぐ傘一人。

どの公園も規模と歴史があり、リージェンツパークも200年近い歴史があります。他方、そこで平日の昼前からジョギングやツーリングを楽しみ、犬を放し飼いにする人々は基本的に白人です。街中を歩いていると、思っていた以上に人種と職業・社会階層が重なりあっていて驚く場面もありました。先日、『わかりあえないイギリス』（岩波新書）という本を読んだばかりということもあり、帝国秩序や民族ヒエラルキー、多文化共生の在り方といった点でも考えさせられるところの多いロンドン滞在でした。[三栖]

2026 年スラヴ・ユーラシア研究東アジア大会

2026 年 5 月 29-31 日に福岡で第 13 回スラヴ・ユーラシア研究東アジア大会が開催されます。5 月 29 日の会場は九州大学、30-31 日は福岡国際会議場です。大会組織委員会は、金山浩司（九州大学）、左近幸村（九州大学）、高橋沙奈美（九州大学）の三氏から構成されます。すでにウェブサイトが開設されており、11 月 10 日から公募が開始されます（公募の締め切りは 2026 年 2 月 10 日）。テーマは「The Age of Multipolarity, or the Arrival of a General Crisis」、パネルと個人発表の形での応募が可能です。詳しくは下記のウェブサイトをご覧ください。奮ってご参加ください！[青島]

<https://sites.google.com/view/eac2026fukuoka>

学会カレンダー

2025 年	11 月 8 日	2025 年度内陸アジア史学会大会 於新潟大学 https://nairikuaasia.sakura.ne.jp/SIAS/events/index.htm
	11 月 8-9 日	ロシア・東欧学会 2025 年度研究大会 於同志社大学 https://sites.google.com/view/jarees2025
	11 月 8-9 日	日本 EU 学会 2025 年度（第 46 回）研究大会 於静岡大学 https://www.eusa-japan.org/?page_id=18
	11 月 14-15 日	CESS (Central Eurasian Studies Society) 2025online Conference オンライン https://centraleurasia.org/conferences/annual-conference-cess-2025/
	11 月 15 日	2025 年度 JCAS（地域研究コンソーシアム）年次集会・一般公開シンポジウム 於京都大学 https://jcas.jp/seminar/annual-meeting/

	11 月 19 日	CESS (Central Eurasian Studies Society) 2025GWU Conference 於ジョージ・ワシントン大学 https://centraleurasia.org/conferences/annual-conference-cess-2025/
	11 月 20–23 日	2025 ASEES (Association for Slavic, East European, and Eurasian Studies) Annual Convention 於ワシントン DC https://aseees.org/convention/2025-convention/
	12 月 4–5 日	スラブ・ユーラシア研究センター 2025 年度冬期国際シンポジウム 於 SRC
2026 年	3 月 25–28 日	ABS (Association for Borderlands Studies) 2026 Annual Conference 於アルバカーキ https://absborderlands.org/meetings/abs-annual-conference/
	4 月 10–12 日	BASEES (British Association for Slavonic and East European Studies) Annual Conference 2026 於バーミンガム大学 https://baseesconference.org
	5 月 28–30 日	ASN (Association for the Study of Nationalities) 30th Annual World Convention 於コロンビア大学 https://www.asnconvention.com
	5 月 29–31 日	The 13th East Asian Conference on Slavic Eurasian Studies 於九州大学・福岡国際会議場 https://sites.google.com/view/eac2026fukuoka
	6 月 20–21 日	日本比較政治学会 2026 年度研究大会 於日本大学 https://www.jacpnet.org/convention/
	10 月 30 日 – 11 月 1 日	日本国際政治学会 2026 年度研究大会 於幕張メッセ国際会議場 https://jair.or.jp

[編集部]

大学院だより

旭硝子財団奨学生研究発表会参加記

私は、2024 年に旭硝子財団の修士課程奨学生に採用されました。この奨学生制度の成果発表会として、2025 年 7 月 29 日に東京で開催された「2025 旭硝子財団奨学生研究発表会」に参加してきました。

奨学生による研究発表会は、同時に実施されていた助成研究発表会の一部と二部に挟まれる形で開催されており、今回はそこでポスター発表する機会を設けていただきました。初めてのポスター発表でしたが、スラブ・ユーラシア研究センターの先輩に相談に乗ってもら

1 旭硝子財団は奨学事業以外にも、地球環境問題に関する「ブループラネット賞」という顕彰事業および環境危機時計[®]の公表、化学・生命、物理・情報、建築・都市、人文・社会科学、環境フィールド研究という 5 つの分野への研究助成事業を行っています。

いながら資料の作成から会場への運搬まで無事に済ませることができました。スラ研には経験豊富な先輩方がいらっしやるので、このような初めての発表でも準備の相談に乗ってもらうことができ、積極的かつ安心して参加することができます。

ポスター発表では、スロヴェニアの国民投票制度の変遷と、これまでの実践についてまとめました。奨学生や助成研究発表に参加している研究者からは、スロヴェニアに注目する理由や個々の国民投票の内容について質問が出ました。「なぜ賛成が低く失敗が多いのに国民投票の実施が多いのか」という質問を受け、スロヴェニアの制度では賛成多数がかならずしも国民投票の成功

を意味するわけではないため、発議主体にとっての国民投票の結果の是非を表に明記しておくべきだったという改善点が見つかりました。こうした改善点が発見できた点や、スロヴェニアの国民投票を研究する意義を認めてもらえた点、修士論文での構成について肯定的な評価を得られた点など、全体を通して手応えのある発表をすることができました。また、助成研究には自然科学分野が多いため、今回の発表では他分野の人々に自分の研究の意義を伝える良い練習の機会となりました。スロヴェニアについて知ってもらうという一番の目的も達成できたと思います。

発表会の後には懇親会が開かれました。すでに軽食のケーキを全種類食べていたのでお腹はいっぱいでしたが、会食を通じて他大学・他分野の奨学生と交流を深めることができました。懇親会のあいさつでは、研究成果を論文にすることの重要性が語られ、それを聞き論文化を見据えて修士論文を執筆する気持ちを強くし帰路につきました。[橋爪]



発表ポスターと筆者

編集室だより

Acta Slavica Iaponica

Acta Slavica Iaponica は、現在 46 巻に関して、通常号と特集号の 2 号の編集が進んでおります。7 月中旬に投稿を締め切った 47 巻に関しても、通常号と特集号の 2 つの号に対して、通常号では article 10 本、review article 1 本の投稿が、特集号では論文 7 本の投稿があり、それぞれについて査読が進んでいるところです。46 巻は 2 つの号ともに年度内に刊行いたしますので、ご期待ください。[諫早]

『スラヴ研究』

『スラヴ研究』第72号が8月末日に無事に出版されました。出版まで長らくお待たせしたことをお詫びするとともに、ご投稿くださった方々、査読にご協力いただいた方々に改めて深くお礼申し上げます。目次についてはすでに前号のニューズレターでお知らせ済みですが、現在はウェブサイトですべての論文が掲載され、オープンアクセスになっております。是非、ご一読ください。

<https://src-h.slav.hokudai.ac.jp/publicn/slavic-studies/72/index.html>

第73号については、投稿が8月末に締め切られました。論文、資料、特別企画の論考を合わせて13件の応募がありました。現在、2026年8月の出版を目指して厳正な審査を行っております。〔青島〕

会議

センター協議員会

2025年度第6回 2025年7月31日（オンライン開催）

1. 令和6年度支出予算決算書について
2. 令和7年度支出予算配当書について
3. 教員人事について（講師）
4. 内規の一部改正について
5. 研究生の退学について

2025年度第7回 2025年7月31日～8月4日（電子投票）

1. 教員人事について（講師）

2025年度第8回 2025年9月16日～9月19日（メール開催）

1. 学生交流覚書の終結について

〔事務係〕

みせらねあ

オレーナ・ニコラエンコさん（昨年度外国人招へい教員／URU・アドバイザリー・ボード・メンバー）の著書・論文の刊行

昨年度、外国人招へい教員としてスラブ・ユーラシア研究センターに滞在していた Olena Nikolayenko (Fordham University, New York) さんの単著がケンブリッジ大学出版局から刊行されました。さらに、論文も発表されました。スラブ・ユーラシア研究センター滞在時の研究が次々花開いています。ニコラエンコさんは、ウクライナ研究ユニット（URU）のアドバイザリー・ボードのメンバーを務めてくださっています。[青島]

Olena Nikolayenko, *Invisible Revolutionaries: Women's Participation in Ukraine's Euromaidan* (Cambridge Studies in Contentious Politics, 2025).

Olena Nikolayenko (23 Sep 2025): "Labor's Repertoire of Contention in an Autocracy: The Case of the 2020 Labor Mobilization in Belarus," *Social Movement Studies*, DOI: 10.1080/14742837.2025.2562889

専任研究員消息

ウルフ・ディビッド研究員は、5/31-7/31 の間、資料収集のため、バークレー、ワシントン、ニューヨーク、ケンブリッジ（アメリカ）、ミュンヘン（ドイツ）に出張。

青島陽子研究員は、7/15-7/27 の間、第 11 回 ICCEES 世界大会出席・報告のため、ロンドン（イギリス）に出張。

服部倫卓研究員は、7/19-7/27 の間、第 11 回 ICCEES 世界大会出席・報告、及び面談のため、ロンドン（イギリス）に出張。

長縄宣博研究員は、7/19-7/28 の間、第 11 回 ICCEES 世界大会出席・報告のため、ロンドン（イギリス）に出張。

安達大輔研究員は、7/19-7/28 の間、第 11 回 ICCEES 世界大会出席・報告のため、ロンドン（イギリス）に出張。また 8/23-9/1 の間、国際スラビスト会議出席・報告のため、パリ（フランス）に出張。

宇山智彦研究員は、8/19-8/23 の間、国際会議 "Towards New Transnational/Transimperial Histories of Central Asia" 出席・報告のため、アスタナ（カザフスタン）に出張。また 8/23-8/28 の間、現地調査のため、リガ（ラトビア）に出張。

野町素己研究員は、8/23-9/1 の間、国際スラビスト会議出席・報告のため、パリ（フランス）に出張。

[事務係]

目 次

研究の最前線	1
2025 年度冬期シンポジウム「大国間競争と中小国の生存」開催予告／ウクライナ研究ユニットから：講演「コペンハーゲン基準再考：EU 加盟候補国ウクライナ、モルドバ、ジョージアの事例を通じて」／ウクライナ研究ユニットから：セミナー「Inhabiting Uncertainty」／2025 年JCREES サマースクールを開催／「東ユーラシア研究」プロジェクト（EES-SRC）のセミナー／ライブニッツ東欧・南東欧研究所所長ウルフ・ブルンバウア教授の来訪／スカコフ氏の研究滞在／横山恒子先生のご来札：研究奨励基金の立ち上げに向けて／SRC セミナー「文理協働シリーズ：古銭学編」報告記／2025 年度中村・鈴川基金奨励研究員の決定・滞在／第5回百瀬フェローの決定／研究会活動	
人事の動き	16
岡部克哉氏が助教に就任／研究員・事務職員の異動	
SRC での充実した夏季研究	18
by オレーナ・ニコラエンコ	
生きた民族学：民博とウポポイの空間における日常の実践	20
by アクサナ・イスマイルベコヴァ	
学界短信	22
第17回国際スラビスト会議参加記／「Esimde: 私の記憶にある」研究プラットフォームにてのセミナー／ICCEES 第11回世界大会（ロンドン）／学会参加記2025 ロンドンとウランバートル／第11回ICCEES 世界大会に参加して／2026年スラヴ・ユーラシア研究東アジア大会／学会カレンダー	
大学院だより	30
旭硝子財団奨学生研究発表会参加記	
編集室だより	31
<i>Acta Slavica Iaponica</i> ／『スラヴ研究』	
会 議	32
センター協議員会	
みせらねあ	33
オレーナ・ニコラエンコさん(昨年度外国人招へい教員／URU・アドバイザー・ボード・メンバー)の著書・論文の刊行／専任研究員消息	

2025 年 10 月 31 日発行

編集	田宮彩也香、宇山智彦
発行者	長縄宣博
発行所	北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター 060-0809 札幌市北区北 9 条西 7 丁目 Tel.011-706-2388、706-3156 Fax.011-706-4952 インターネットホームページ： http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/
